

漢法苞徳塾資料	No. 025
区分	治療・臨床
タイトル	カゼとその近縁の漢法的な区分
著者	八木素萌
作成日	1998.05 修訂

	病証	傷寒	温病
証候	発熱	どちらと言えれば軽い	高熱になりやすい
	悪寒	強い	ほとんど無いか弱い
	頭痛・身体痛	重い	軽い
	口渇	無い	少しある
	小便	色は水のように淡く、量も多くなる傾向	黄色味が強くなり、量・回数が減る傾向
	皮膚過敏	表れない	アレルギー的な過敏さが出易い
	扁桃腺症状	あまり多くない	出易い
	舌質	特に変化は見られない	辺縁部・舌尖部が赤く剥けた様な感じ
	舌苔	薄く白い舌苔がある	薄く白い舌苔があるか、中央部に黄色味を帯びる時もある
	脈象	浮で緊	浮で数 (=早い)
	病因	寒さが体表の機能を低下させた	温邪が客停するため (主に体表)
	治法	辛温解表の法	辛温疏表解毒の法

※ 傷寒は陽を傷り、温病は陰を傷る、といった傾向がある。

傷寒は太陽膀胱経を傷り、温病は太陰肺経を傷る。

※ 温病は上記の他に風・燥・暑・湿の区別があり、下記の症候的特徴が加わる。

風温……悪風、口微かに渇、咳嗽

暑温……壮熱、口渇の為多飲となる、多汗 (陽明の分の熱盛となる)

湿温……熱がこもる感じが強く、身体が重だるく感じ、胸や上腹の痞え、吐き気、小便の濁り、
ベタベタの軟便、等消化器系症状を含む。

燥温……口、鼻、咽喉の乾燥感。

※ 傷寒の初期は麻黄湯・桂枝湯とその加減方

温病の初期は銀翹散・天津感冒片・驅風解毒湯・柴胡剤系の加減方

◆「傷寒は陽を傷る」と表現することがある。

「寒邪」は陰邪であるから身体の陰の部分に行きたいのであるが、抵抗力の最前線である衛気と激的な闘争に勝利しなければ、身体の陰の部分には入れない。そこで、体表での衛気との抗争を「陽を傷る」、と表現することになる。主として太陽経が冒される。

「温病は陰を傷る」と表現されている。

「温邪」は陽邪であるから身体の陽に親和性が高い。したがって「表陽の気」（＝体表の衛気）は病邪に容易に倒されてしまう。その結果、「温邪」は身体の陰の部分に入りやすくなる。ゆえに、「温病は陰を傷る」と表現することになる。主として太陰肺経または陽明経が冒される。

(八木 注)